

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Lack of catch-up in weight gain may intermediate between pregnancies with hyperemesis gravidarum and reduced fetal growth: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠悪阻と胎児発育不良との関連は、妊娠中後期に体重増加不良を補完できないことが原因かもしれない: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名:九州ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:福岡ユニットセンター(九州大学)

発表雑誌名: BMC pregnancy and childbirth

年: 2022

DOI: 10.1186/s12884-022-04542-0

筆頭著者名: 森崎 菜穂

所属 UC 名: 九州ユニットセンター

目的:

「つわりがある妊娠では子どもの出生体重が大きくなるのに、妊娠悪阻を伴う妊娠では子どもの出生体重が小さくなる」という、一見相反する現象の原因は不明であった。本研究では、妊娠中の妊婦の体重増加の推移の違いが、妊娠悪阻を伴う妊娠で赤ちゃんが小さく生まれる事象を説明できるかを検討することとした。

方法:

エコチル調査参加者の妊娠 28-41 週で分娩した単胎妊娠 91,313 名を解析対象とした。妊娠初期の体重変化およびつわりの重症度で分類し、妊娠初期の体重変化とつわりの重症度がそれぞれ子どもの出生時体重と SGA (small for gestational age) に及ぼす影響を回帰モデルで評価した。さらに、これらの関係が妊娠中期までの母親の体重増加によってどのように変化するかを検討した。

結果:

5,196 人 (5.7%) が妊娠初期に体重が 5% 以上減少し (妊娠悪阻と定義)、9,983 人 (10.9%) がつわりにより食えることができなかった。妊娠悪阻の女性は、妊娠初期に体重が 3% 以上増加した女性に比較して、生まれた子どもの出生体重が 66 (95%CI: 53, 78) g 軽く、SGA のオッズが高かった (調整後オッズ比 (aOR): 1.29, 95%CI: 1.14, 1.47)。しかし、妊娠中期までの体重増加量で調整すると、妊娠悪阻があった女性の方が、児の出生体重が 150 (95%CI: 135, 165) g 重く、SGA のオッズが低く (aOR: 0.39, 95%CI: 0.33, 0.46) になった。また、つわりがあった女性は、妊娠中期までの体重増加量での調節の有無にかかわらず、つわりがなかった女性よりも児の出生時体重が高く、SGA のオッズが低かった。

考察 (研究の限界を含める):

本研究の結果から、妊娠悪阻があっても、妊娠中期までに総妊婦体重増加量が追い付けば、胎児発育量は妊娠悪阻がない女性より大きくなることが示された。本結果と先行研究から、妊娠悪阻の女性は、妊娠初期の体重減少そのものではなく、むしろ妊娠中期以降も体重増加が伸び悩むことが多いことが、胎児発育低下の一因であると考えられる。これは、妊娠悪阻による出産への悪影響は、吐き気や嘔吐が収まった後の教育的・栄養的介入により予防可能であることを示唆するものである。本研究の限界として、妊娠悪阻の定義として、臨床診断ではなく、妊娠初期の 5% 以上の体重減少と定義したことなどがあげられる。

結論:

妊娠悪阻のある妊娠における胎児発育低下は、つわりが終わったあとの妊娠中期までの妊婦体重増加量が伸びず、結果的に総妊婦体重増加量が追いついていないことが原因であるかもしれない。妊娠悪阻による出産への悪影響は、吐き気や嘔吐が収まった後の教育的・栄養的介入により予防できる可能性が示唆された。